

偶発性・一回性・有限性

——ロラン・バルト「作者の死」「作品からテキストへ」についてのノート——

 千田 洋幸

1

ロラン・バルトの著名な二つのエッセイ、「作者の死」(1968)「作品からテキストへ」(1971)といえば、文学研究にかかわろうとする者が初学の段階でかならず通過しなければならないひとつの関門として知られている。この二つの文章から、「テキスト」「作者」「読者」「エクリチュール」等々の概念についてさまざまに啓示を受けた人は多いだろう。もちろん、筆者もそのような一人であった。

本稿は、この「作者の死」「作品からテキストへ」、さらには『記号の国』(1970)にもすこし触れながら、バルトにおける書くこと／読むことの問題について触れていきたいと思うのだが、とくに後者に関しては、文学理論としてのプラグマティックな意義が強調され、それがいささか安易な適用を生んできたようにも思う^(注1)。今さらこのことをあげつらっても仕方がないのだろうが、たとえば、日本でもっとも広く読まれていると思われるチャート的な文学理論概説書の一つ、『ワードマップ現代文学理論』^(注2)は、「作者の死」について、「作品とテキストを対立させ、作品は作者のもの、そして、テキストは読者のものであることを明らかにし、作品と作者に死の宣告をした」「テキストを読む読者は、多次元性、多元性の場において、読む行為とエクリチュールの相互関係に陥り、新たな意味の創造を始める。作家によって記されたエクリチュール(書かれたもの)を、テキストとして読者が再びエクリチュール(書く行為)するのである。古典的な読者が受動的であったのに対し、テキストを前にした読者は積極的に意味生成に参加し、生産行為を行なう主体へと変貌する」……と解説する。膨大に存在する他の文学理論書も大同小異であり、「作者」の概念を解体することによって、テキストと読者の関係に新たな可能性を作り出した歴史的なエッセイとして、「作者の死」「作品からテキストへ」が評価されている。

バルトがこのような——「テキスト論」の地平を切りひらいたポスト構造主義者としての——受容のされ方をすることによって、文学研究の視界を拡大する役割を果たしたことは、もちろん否定できない。私のフィールドである日本近代文学研究においても、とくに一九八〇年代以後、「作者／作品」概念の解体と再編は大きな方法的変革をもたらして

いった。バルトは、この時期に日本語訳されたジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』(1972)、W・イーザー『行為としての読書』(1976)、スタンリー・フィッシュ『このクラスにテキストはありますか』(1980)などと並び、新しい理論を語るときに決して欠かせない固有名であった。

だが、バルトの二つのエッセイが、これらの研究と並列されるような方法論の著書ではありえないことも、もはや自明だろう。それは、書くこと／読むことの体系的理論であるどころか、テキストを解釈する行為自体を迷宮化し、あるいはそれに不可能性を授けてしまう過剰なラジカリズムを備えた言説にほかならなかった。以下、いまだに便利なテキスト理論として扱われがちなバルトの言説から異なった可能性を導くべく、あらためて二つのエッセイを読み解いてみたいと思う。

2

作者の「死」——バルトの言葉を借りるなら、「父親が子供に対してもつと同じ先行関係を」もち、書物を支配しようとする「近代の登場人物」を遠ざけること、とひとまずはとらえることができるだろう。しかし、素朴な疑問だが、なぜ「死」という語が使われなければならないのだろうか。たんに方法論として、テキスト概念の創造、あるいは新しい読者の誕生を揚言するのであれば、「作者の解体」とか、「作者との訣別」といった温厚なタイトルでもよかったはずである。

バルトは「作者の死」の冒頭近く、「ある事実が、もはや現実¹に直接働きかけるためにはなく、自動的な目的のために物語²られるやいなや、つまり要するに、象徴の行使そのものを除き、すべての機能が停止するやいなや、ただちにこうした断絶が生じ、声³がその起源を失い、作者が自分自身の死を迎え、エクリチュールが始まるのである」と語る。そっと置かれた「自動的」という言葉は重要である。バルトにとってのエクリチュールとは、もっぱら自動詞的な欲望の発現を指すのであり、ある対象や目的の存在を前提とする他動詞的な行為ではない^(注3)。同様のことが、シュールレアリスムの自動筆記法や、誓い、宣言などを例とした、いわゆる行為遂行的言語に託されて語られる。エクリチュールが始まることによって、作者は己れの「意図」を失い、自己の内部に果てのない一冊の辞書を備える「書き手」^{スクリプトゥール}にとって代わられるのである。

かつての古典的な（そして現在でもある程度存在している）作家論においては、ある作者が作品の形で物語内容、主題、思想……を生み出すことが前提となっている。生み出された思想は、作家論を語る論者によってふたたび作者にフィードバックされ、作者の価値と存在理由とを形づくる。だがバルトのいうエクリチュールの場においては、そうした表現行為の一切が排除され、テキストは自動的に言葉を紡ぐ⁴ 快楽の産物としてのみ存在する。そのテキストとは、前時代の先行テキストを超越した独創の産物などではなく、既存のコードの「裏をかく」ことによってかろうじて成り立った言語活動の結果にすぎない。

作者ではなく「書き手」^{スクリプトワール}としての存在を必然とされることは、ある種の作家にとって
は相容れないものであろう。エクリチュールは、思想を生産するどころか、書くことの対
象や目的をその都度「蒸発」させることにもっぱら奉仕するのだとすれば、書かれた小説
や詩が作者自身にフィードバックし文学的権威を与える、という作用ももちろん消滅し、
時間を超えた文学の永続も、他者との壁を越えた共有も、究極の不可能性に立ち至るしか
なくなる。「自分の肉体は滅びても作品は後世に残る」とか、「自分の作品は読者に送る
メッセージである」とか、「作品を創造することによって作者はアイデンティティを獲得
する」とかいった、少なからぬ作家をいまだにとらえているであろう願望、「私」「アイ
デンティティ」といった起源の所在を書く行為の前提とする認識は、もはやたんなる戯れ言
でしかない。作者はこうして、名としても実体としても「死」ぬ。それはほとんど物質的
な「死」にもひとしい。

こうしたバルトの姿勢に対しては、もちろん批判もある。野崎歓は、「作者の死」につ
いて、「(バルトの) 本来的な、繊細な美質を裏切る」「荒々しさが感じられる」と指摘
し、「テキストの読解にはより「対話」的な要素がありうるのではないか。作者をあらか
じめどうあっても排除しなければならないという言い方は、かえってわれわれと作品の関
係にとって抑圧的な作用を及ぼしかねないだろう」^(注4)と、しごくもっともともいえる
批判を展開する。そして野崎は、「翻訳者」という概念を導入しながら、「テキスト生成の
場に必ず存在するはずなのだが、しかし完全な捕捉を逃れ、常に揺れ動いてやまない」存
在としての作者を新たに立ち上げるにより、作者性の方法論的な可能性に言及しよう
とする。

「作者の死」を文学研究への導入可能性として読もうとする立場からすれば、野崎の苛
立ちは確かにその通りであろう。だが結局のところ、バルトの言説を、解釈行為に奉仕す
べきプラグマティックな理論としてとらえているという点では、バルトを「テキスト論」
の提唱者と見なす通俗的なチャートの文学理論書とおなじ認識を共有しているにすぎない
のではないか。

くり返し述べるように、「作者の死」は、文学を書く行為を解釈するための理論ではな
い。それは、文学を書くという出来事の出来事性について——つまり、書くという行為が
遂行されているとき、そこに何が起きているのかを——語っている文章なのであり、そ
れを突きつめれば、むしろ解釈するという研究の営み自体が不可能となってしまう性質の
ものである。バルトがこのエッセイで、エクリチュールの実践を表現するために用いてい
るさまざまな語り——「書くということは、それに先立つ非人称性（中略）を通して、
《自我》ではなく、ただ言語活動だけが働きかけ《遂行する》地点に達することである」
「言表行為の時間のほかに時間は存在せず、あらゆるテキストは永遠にいま、ここで書か
れる」「手はあらゆる声から解放され、純然たる記入の動作（表現の動作ではない）に運
ばれて、起源をもたない場を描きだす」……をそのままに受け入れるなら、それは、言語
による意味生成につねに・すでに内包されている、と私たちが想定しているところの、言

語＝記号の反復可能性すら拒絶しかねない場である。書く行為を文学理論の内部で捕捉しようとするなら、言語＝記号は反復可能であるということが当然の前提となるが、バルトのエクリチュールはそのような形でとらえることが不可能な、反 - 反復的、反 - 複製的な快楽と欲望の場に接近するのだ。

私たちは通常、ある理論を導入してあるテキストを論じるとき、他のテキストを論じる際にも導入可能な汎用性のある方法に依拠しつつ、自身の意味生成を行うべく努める。しかしバルトのエクリチュールの理念にしたがうなら、そのような方法は神学的解釈の一形態にすぎず、エクリチュールを喪失し、テキストの理念それ自体を抹殺する結果しかもたらさない。バルトが「作者の死」で語っていることは、たんに「作者」という存在の抹殺にとどまらず、書かれた文学を解釈することそのものの不可能性なのである。

バルトの言説にこういう理念を見いだしたくなってしまうのは、現在の日本に他動詞的な衝動が溢れかえっているからなのかもしれない。みずからの「実存」を賭けて文学や思想の言葉を内面から引きずり出し、読者を動かそうとする強迫観念とも見まがう衝動——そのミニチュアはネットやSNSにも溢れかえっている——が蔓延し、つぎのような言葉を恥ずかしげもなく作者自身に語らせてしまう。

（植本一子）いつも言っているんですが、私って、本当に自分の身に起きた、本当のことしか書けないんです。それは読むときも一緒に、本当のことしか読みたくないという気持ちがつねにあって。

（金原ひとみ）私もそうです。

（金原）小説って、必ず人に伝わるっていう気持ちで書いているんですけど、でも、それは安易に理解できる、共感できるってことではなく、伝わらないということが伝わればいいなという思いで書いているんです。^{（注5）}

たまたま目に入ってしまった対談からの引用である。後者の金原の方は、小説の言葉におけるディスコミュニケーション（まったく当たり前のことではあるが）を意識しているだけいくぶんかましなのかもしれないが、それにしても、いつの時代の小説家の言葉かと疑わざるをえない代物だろう。こういう言葉がリアリティをもってしてしまうのが現代という時代の不幸なのかもしれないが……。いずれにせよ、こういう起源の病に取り憑かれた作家たちについては、「ほんとういうとあなたは物語をつくるというか、小説をつくるみたいなモチーフをさ、ほんとは喪失しているのに、（注・『地の果て 至上の時』を）こしらえていたのじゃないかなとおもえたりする」という吉本隆明の問いに対し、「路地」を考えますと、いくらでも、私自身のモチーフなどはあぶくのようにわいてくるんです。というのも「路地」の語り部みたいにおもっているんですから」「作品の背後に作家がい

て、モチーフがあるという、そのことをあんまり信用なさらないほうがいいとおもうのです」とあっさり答えてみせた中上健次の言葉^(注6)でも対置しておくべきなのかもしれない。

バルトがエクリチュールの理念を変容・拡張させていった一九六〇年代、それに引き続く七〇年代は、現在と同様、あるいはそれ以上に、強烈な思想的・文学的メッセージを表明することが——つまり他動詞的主体であることが——求められた時代だったであろう。そうした状況に抗うように、あるいは遁走するように、バルトはまったく新しい快楽と欲望の論理を創り出していった。そして一見反時代的な彼の言語についての思考は、過激な装いをもった同時代のどのような思想的・文学的言説にもまさって革命的だったのである。

3

「作品からテキストへ」はより読者の側に重心がおかれた批評であるが、やはり、文学理論に効果的に奉仕するかのような種々の言説に満ちているようにみえる。「作品のほろこそ「テキスト」の想像上の尻尾なのである」「「テキスト」を規正する論理は、了解的ではなく（作品が《言おうとすること》を定義するものではなく）、換喩的である」「「テキスト」はといえば、「父」の記名なしに読まれる」……等々。だが、ここで注目したいのは、またしても解釈することの不可能性をつきつけてくる、つぎの部分だ。

「テキスト」は複数的である。ということは、単に「テキスト」がいくつもの意味をもつということではなく、意味の複数性そのものを実現するということである。それは還元不可能な複数性である（ただ単に容認可能な複数性ではない）。「テキスト」は意味の共存ではない。それは通過であり、横断である。したがって「テキスト」は、たとえ自由な解釈であっても解釈に属することはありえず、爆発に、散布に属する。実際、「テキスト」の複数性は、内容の曖昧さに由来するものではなく、「テキスト」を織りなしている記号表現の、立体的複数性とでも呼べるものに由来するのだ（語源的に、テキストとは織物のことである）。「テキスト」の読者は、（自分のなかの想像的なものをすべて取り払った）無為な主体に比べられよう。適当に空虚なこの主体が、ワジ〔北アフリカの水なし川〕の流れる谷間の中腹（ワジがとここに出てくるのは、ある種の異郷感を保証するためである）を散歩する（これはこの拙文の筆者にもあったことで、筆者が「テキスト」の生きた観念をつかんだのは、そうした場所においてである）。彼が知覚するのは、互いに異質でちぐはぐな実質や平面に由来する、多様で還元不可能なものである。光、色、草木、暑さ、大気、わきあがる小さな物音、かすかな鳥の鳴き声、谷間の向こう岸の子供たちの声、すぐ近くや非常に遠くを通りすぎる住民たちの往来、身振り、衣服。これらの偶発的なものは、どれも半ばしか同定できない。それらは既知のコードから来ているのだが、しかしその結合

関係は唯一であって、これが散歩を差異にもとづいてつくりあげ、差異としてしか繰りかえされないようにするのだ。「テキスト」に起こるのも、これと同じことである。つまり、「テキスト」は、その差異（ということは、その個性という意味ではない）においてしか、「テキスト」でありえない。「テキスト」の読書は、**一回性**の行為である（このことが、テキストに関するいかなる帰納的＝演繹的科学をも幻想に変えてしまう。テキストの《文法》は存在しないのである）。[ゴシック強調は引用者]

テキストの読者が、散歩する主体に擬せられていることに注意しよう。異郷を歩く主体が、光や自然、鳥の鳴き声や子供たちの声、住民たちの往来や身振り……に出会うこと。それらすべての経験は偶発的かつ一回的であり、それ故に差異としてしか存在しない。おなじように、テキストの言葉たちに出会うことも、つねに偶発的かつ一回的な差異の経験でしかありえない。そうバルトは語っている。

何気ないようではあるが、これは解釈という行為そのものを無化する、およそ反 - 理論的な宣言である。私たちはテキストを解釈する（論じる）とき、当然のことながら、初読、再読、三読、n読……と、幾度となく読むことをくり返す。だが、テキストを何度読み込もうと、それぞれの読書は——散歩という行為とおなじく——つねに偶発的かつ一回的な差異の出来事である。初読から再読へ、再読からn読へ……と読みを重ねることは、現在の読みを上書きし、過去の読みを喪失していく偶然と恣意の経験なのであり、しかもそれぞれの読みはつねに一度しか起こらず、反復＝交換不可能である。ある瞬間に生み出された読みはその都度消え去り、二度と取り戻すことはできないのだ。だから、テキストにある読みを与える行為は原理的に不可能なのであり、私たちが解釈と名づけているものは、あくまでもひとつの仮設、限定、断念のもとに行われている作業にすぎない。バルトの語る「還元不可能な複数性」、すなわち「意味の複数性そのものを実現する」とは、テキストを読むときにならず生起するそのような複数性の問題を含むのであり、テキストにさまざまな読みを与えることができる（＝「^{アクセプタブル}容認可能な複数性」）ということとはむしろ正反対の事態を指している。いうまでもなく、前節で述べたエクリチュールの理念は、このことと通底する。

テキストの読書が偶発的かつ一回的である、ということをもう少し大げさに敷衍すれば、それは私たちの生そのものだ、ということになるだろう。読書という行為が、たまたま一回だけ起こる反復＝交換不可能な出来事である、ということは、私たちの生きる人生の時間が、偶発性と一回性に支配された出来事の連なりによって生成されている、ということと等価である。読者とは、後戻りのできない一度だけの人生の時間のなかで、偶発性に満ちた読みをくり返すだけの存在にすぎない。テキストの「還元不可能な複数性」、すなわち解釈することの不可能性を明示することは、必然的に、そういう読者＝私たち自身の有限性を顕在化させる。「作者の死」「作品からテキストへ」は、作者の消滅と引き換えに読者の誕生を謳っていると考えられがちだが、むしろ読むという行為が、読者自身の有

限性と不可分であることを示す文章として読まれなければならないのである。

もちろん、私たちの日常的な読書行為にはらまれている偶発性と一回性はきわめてささやかなものであり、読書をしながらみずからの有限性にまで思い至る人はおそらくいるまい。だが、二つのエッセイの認識を大きく拡張すれば、のちにバルトが『明るい部屋』(1980)で、「何世代もの人々の生や死や無慈悲な消滅」を実感しながら語った、「いったいなぜ、私はいま、ここに生きているのか？」という驚きへと至りつくのではないか。それはパスカルが『パンセ』で語っている、「どうしてあの時より今なのか。誰が私をここに置いたのか。誰の命令、誰の導きによって、この場所とこの時が私に割り当てられたのか」という「自分がある所ではなくここにいること」への驚きと同義であろう。パスカルが直面したのは、自己という存在の一回性と有限性、偶発性と恣意性であり、それはつきつめればあらゆる人間に共有されうる問題である。私たちはテキストの「還元不可能な複数性」と出会うことによって、一度だけの経験に支配されている自己の有限性、差異としてしか存在しえない自己の偶発性に——あるいはその縁に——かろうじて触れる。テキストを読む行為そのものが、私たちの生の根源的なあり方を照射するのである。

4

さて、「作者の死」「作品からテキストへ」の二つのエッセイとほぼ同時期に刊行され、バルトのエクリチュールの理念を捕捉するための格好の著書と考えられている『記号の国』について、最後に触れておくことにしたい。

『記号の国』が、単なる日本滞在記ではなく、「エクリチュールの国」としての日本を見いだした旅の軌跡である、ということは現在ほぼ定説である。「なぜ、日本なのか。筆者が訪ねることのできたすべての国のなかで、日本は、筆者の信念と夢想とにもっとも近い記号のはたらきに出会えた国だからである。西欧の記号支配が筆者にひきおこす嫌悪感やいらだちや拒絶からもっとも遠い記号のはたらき、と言ってもいいだろう」。バルトも、ある側面では、たとえばアレクサンドル・コジェーヴの日本文化への考察^(注7)などと同じく、西欧という「意味の帝国、の対概念として日本文化をとらえている(もちろん、それに対する価値の与え方はバルトとコジェーヴとでは対照的だが)」。だがバルトは、「われわれの主体が逃げ去ってしまう、あの中性的なもの、混成的なもの、間接的なもの」(「作者の死」)としてのエクリチュールを実践する国として日本を発見したのであり、日本に「ポスト歴史」の極まりとその結果としての「スノビズム」を見いだしたコジェーヴの西欧中心主義とは根本的に異質である。両者がともに「欠如」とか「空虚」といった言葉を使用していても、その内実はまったく異なるのである。

ここでは、『記号の国』のなかでもとくに印象的な俳句への考察について、すこし違う角度から振りかえてみよう。

……解釈という方法では、俳句をとらえそこなうことしかできない。なぜなら、俳句にむすびついた読解の作業とは、言葉を誘発することではなく、言葉を中断することだからである。

芭蕉が水音を耳にして発見したのは、もちろん「啓示」とか象徴への過敏とかいった主題ではなく、むしろ言語の終焉である。

俳句は、描写も定義もしない。(中略)俳句は、細くなってゆき、ただ指示するだけになってしまう。(中略)俳句においては、意味は一瞬の閃光、光の浅い傷跡にすぎない。

「エクリチュールの国」として日本を発見したバルトが、俳句というジャンルに魅せられたのは当然だったかもしれない。俳句にはただ「指示する」ことのみがあり、思想も主題も見いだせない空虚がそこに存在する。バルトにとっての俳句とは、言葉の「中断」「終焉」なのだから、いわゆる余白や余韻といったものを想定して、そこに意味を見いだしたり、想像力を働かせたりしてはならない。意味が不在となることによって、俳句に詠まれる風景は、バルトが章題に用いている「偶景」、すなわちたんなる出来事となる。その出来事はやはり、偶発的であるとともに一回的であり、反復＝交換不可能である。

こうして、俳句に関するバルトの考察は、「作者の死」「作品からテキストへ」で展開されていた書くこと／読むことの——ひいては人の生そのものの——問題にふたたび接近する。わずか十七音の俳句に、人間の人生を想像させるような長大な物語は内在していない。しかし、それが偶発性と一回性にとり満たされた出来事の表象であるゆえに、私たちの生に不可避的に抱えこまれている非 - 物語性と相似するのである。

「作者の死」「作品からテキストへ」について、「構造主義以降の「主体の死」を高らかに宣言しているように見えながらも、じつは書くように読んでゆくという読書の楽しみを語っている」「批評活動から読書の快楽へ移行してゆきつつある」^(注8)という規定はその通りだろうし、この時期のバルトを語る言葉としての的確だろうとは思ふ。だが、書くこと／読むことの出来事性の問題をさらに拡張して、それを私たちが生きる行為そのものに擬するなら、一回性と有限性、偶発性と恣意性にとり満ち、意味や物語に還元しえない生の姿、そして「快楽の人」とはすこし異なったバルトの像が浮き彫りにされてくるのではないだろうか。この問題は、おそらくその後もバルトの内部に潜在し、たとえば『明るい部屋』におけるルイス・ペインの写真への言及——彼が死のうとしている未来と、すでに死んでしまっている過去との交錯——へと接続しているように思われる。もちろん、よく知られている母アンリエットの「喪」の問題も、ここに含まれるだろう。

バルトの言説は、物語を紡ぎ出すことによってしか生きていけない私たちの意識に暴力的な変革をせまる。私たちは自己の過去を記憶＝物語化することによってアイデンティ

ティを保っているが、そもそも物語を生成するはずのテキストが、偶発性と一回性、反復＝交換不可能性に満たされた出来事の集積であり、そこに主体も意味の中心もあり得ないとすると、アイデンティティを保証するものは何もなくなる。そういう、バルトの三つのエッセイのもっとも過激なエッセンスをどう取り扱うべきなのか。その部分はあえて括弧にくくってしまい、文学理論としてのプラグマティックな活用をめざすのか。そこでは、物語とともに在らざるをえない私たちの主体それ自体が問い直されることになるだろう。

注

- (1) 一方、蓮實重彦は、「『思想史』的な見取り図」「バルトの学術的な「カノン」化」を排し、「欲望の人、官能の人、快楽の人」「語の最良の意味における批評家＝エッセイスト」としてのバルトを前景化している。『批評あるいは仮死の祭典』（1974・5、せりか書房）、「バルトとフィクション——『彼自身によるロラン・バルト』を「リメイク」する試み——」（『文学界』2006・1）を参照。
- (2) 土田知則・神郡悦子・伊藤直哉『ワードマップ現代文学理論——テキスト・読み・世界』（1996・11、新曜社）。
- (3) 花輪光は、『零度のエクリチュール』（1953）で提示された「エクリチュール」について、「他動詞的で、コミュニケーションのための言語活動を意味する」とし、一方、本稿で取りあげている三つのエッセイ（『記号の国』を含む）の時期の「エクリチュール」については、「自動詞的で、自己目的な言語活動である」と指摘している（『物語の構造分析』訳者解題 1979・11、みすず書房）。
- (4) 野崎敏「作者と訳者の境界で——ロラン・バルトから森鷗外へ」（日本近代文学会関西支部編『作家／作者とは何か——テキスト・教室・サブカルチャー』2015・11、和泉書院）。
- (5) 金原ひとみ・植本一子「対談 平穏を求め、破滅に安らぐ」（『すばる』2019・7）。
- (6) 吉本隆明『現在における差異』（1985・1、福武書店）。
- (7) アレクサンドル・コジューヴ『ヘーゲル読解入門——『精神現象学』を読む』（上妻精・今野雅方訳 1987・10、国文社）。「『ポスト歴史の』日本の文明は「アメリカ的生活様式」とは正反対の道を進んだ。おそらく、日本にはもはや語の「ヨーロッパ的」或いは「歴史的」な意味での宗教も道徳も政治もないのであろう。だが、生のままのスノビズムがそこでは「自然的」或いは「動物的」な所与を否定する規律を創り出していた。（中略）日本人はすべて例外なくすっかり形式化された価値に基づき、すなわち「歴史的」という意味での「人間的」な内容をすべて失った価値に基づき、現に生きている」等の記述を含む。同書によれば、コジューヴは一九五九年に日本に旅行し、その後こうした認識にたどりついたという。
- (8) 石川美子『ロラン・バルト——言語を愛し恐れつづけた批評家』（2015・9、中公新書）。

※バルトのテキストについては、以下の翻訳を用いた。

「作者の死」「作品からテキストへ」——『物語の構造分析』（花輪光訳 1979・11、みすず書房）
『記号の国』——『ロラン・バルト著作集7 記号の国』（石川美子訳 2004・11、みすず書房）

Contingency, Oneness, and Finiteness :

Note on Roland Barthes “La mort de l’auteur” “De l’oeuvre au texte”

Hiroyuki CHIDA

Roland Barthes “La mort de l’auteur” “De l’oeuvre au texte” is often read as a theory that breaks down the concept of text, but if you look at it from a different perspective, you can see that it is an essay inscribed with the problems of contingency and oneness inherent in the act of writing/reading, and the finiteness of human life itself that it points to. This is also true of Barthes records of his stay in Japan “L’EMPIRE DES SIGNES”. These three essays on the uninterpretable nature of text are extremely radical in the sense that they force a violent change in our consciousness, which lives only by producing stories.